

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕 アメリカでの調査

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 格子, Makino, Noriko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000474 |

アメリカでの調査

牧野格子

筆者は、二〇一七年度に国外派遣研究の任を受け、四月から九月末までの半年間、アメリカのハーバード大学に滞在した。研究テーマである謝冰心（一九〇〇年～一九九九年）という中国女性作家のアメリカ留学時期（一九二三年～二六年）の調査をするためであった。五月頃から調査に本腰を入れ、彼女が留学していたボストン郊外にあるウエルズリー大学に足繁く通った。実は、筆者が大学院生だった頃の一九九七年から当大学を訪問していたが、整理が進んだのか、以前よりも多くの資料を閲覧でき、多くの収獲を得た。

謝冰心の大学時代の恩師に、グレース・ポイントン（一八九〇年～一九七〇年）というアメリカ人女性がいた。ポイントンは、一九一九年に来華し、一九五一年まで中国での教育に従事した。彼女はアメリカン・ボードというプロテスタントの海外宣教団体から派遣され、英語、英文学を担当する教員であると同時に、宣教師であった。実際に謝冰心を受洗まで導いている。

ポイントンもウエルズリー大学の出身で、中国でお気に入りの学生であった謝冰心を自らの母校に送り込んだのであった。ウエルズリー大学のアーカイブで謝冰心とその周辺の人々について調査をしていた間、ポイントンのファイルに、他所にポイントンに関する資料があることを示す紙に気づいた。ラドクリフ研究所に日記が、ホートン図書館に書簡が収蔵されていたのである。この紙については、過去二回訪問時見たはずなのに、やっと気づいたのである。しかも二箇所ともハーバード大学内にある。

六月半ばからラドクリフ研究所での調査を開始したところ、三箱にもなる膨大な数の資料であった。一九二四年から

五十一年まで断続的に小さな手帳にびっしりと書かれていた。一九六〇年代にポイントンが自ら整理したタイプ原稿も一緒に収められていた。しかし、詳細に読んでみると手書きとタイプ原稿では違う箇所があり、タイプ原稿のみ撮影というわけにはいかなかった。五千頁以上の資料を立ったり座ったりしながら、月曜から金曜、九時から十七時までただひたすら撮影し続けた。一ヶ月程で何とか完了した。

次にホートン図書館へと向かうと、書簡は四箱もあり、七百通を超えるこれまた膨大な資料であった。この時すでに七月に入っており、九月末の台湾への移動とその準備を考えるとわかには焦り始めた。ホートン図書館は土曜日も開館し、開館時間も九時から十九時までと比較的長かったため、意外と作業は早く進んだ。しかし、書簡は英文筆記体であり、私が独力で解読し活用できるとは到底思えなかった。

さらに焦燥感を抱いたのは、他の中国入学者が同じ資料の閲覧予約をしてきたことであった。アメリカはこの点是非常に公平で、譲りあいながらの閲覧を勧めている。実際鉢合わせすることはなかったが、激しい競争に晒されていることを実感した。中国入学者の手にかかれば、すぐに解読し論文を書いてしまうだろう。日本人である筆者は、英語と中国語の間に日本語のワンクッションを置かねばならない。誰かが手を付ければ、ひとたまりもない。

英文筆記体の解読に関し、知り合いの日本人やホートン図書館職員に尋ね、所属学部の秘書に誰かを紹介してもらったことにした。秘書は院生や学部生に募集メールを送ってくれた。実際応募してきたのは二名だったが、そのうちの院生一人に解読補助をお願いした。この院生と知り合えたのは非常に幸運であった。

八月半ば、やっと書簡の撮影も終わり、日本から来訪した友人たちを出迎えた。観光案内をしている内に、毎日黙々と調査をしていたため、殆ど誰とも喋っていないことに気づいた。この時ようやく人間らしい感情を取り戻したのである。

アメリカでの半年間は、毎日早起きし、バタバタと各地に行っていたため、ゆっくりしただけの、遊んだなどという記憶は殆どない。その代わりに大きな収穫を得ることができた。幸運なことに、まだこの資料は発表されていないようである。日本人研究者の長所はじっくりと丹念に読み込むことである。今年度その成果として論文を書き続けている。早いうちにまとめて出版したいと考えている。